

## 「度胸と愛嬌 ～魅力あふれる人々が稲城を創る～」

2018年度 稲城青年会議所

第43代理事長 伊東 誠太郎

「はじめに」

男は度胸、女は愛嬌、それははるか昔のこと、現在では、老いも若きも男も女も、誰もが皆、度胸も愛嬌も必要です。自分が信じる夢や理想に向かって一步を踏み出すためには度胸が必要です。そして踏み出した一步で終わらず周囲の人々の協力を得て夢や理想を実現していくためには、愛嬌が必要です。この1年、稲城青年会議所のメンバーそれぞれが、度胸と愛嬌を発揮しながら青年会議所運動に取り組んで参ります。

「現役世代のうちから地縁を深めること」

私は20代後半をサラリーマンとして過ごしました。忙しい会社に、忙しい立場で勤めておりましたので、朝早く起きて、深夜に遅く帰る、まさに「寝に帰る」という生活でした。幸い気に入った場所に中古の戸建てを買うことができましたが、「これならどこでも同じだな」「ただ眠るだけだな」という感覚が常にありました。素晴らしい特色があるはずの場所で、そこに根を生やすこともできずただ日々だけが過ぎていく、ぐっと暗く心に迫る袋小路のような心境は、今でも肌身に感じるすることができます。

今、稲城では、地元で商売をしている方よりも、都心で働いている方が主流となっており、毎日約3万人の方々が稲城市街へ通勤・通学しています。結婚して、子供ができて、マイホーム、引退、年金、孫の顔、いわゆる「昭和の人生すごろく」は既に崩壊していると言われています。しかし、それでもなお、60代で生活費を稼ぐための仕事を引退する方が多いでしょう。60代で引退したときに、心身ともに元気で、地域のために何かをしたい、あるいは自分の興味を追求したいと思っても、その一步が踏み出せない方がたくさんいます。いきなり見ず知らずの世界に飛び込んで人間関係を築いていくのは億劫なものです。そして、人間関係が希薄な方ほど、幸福感を感じにくいと、各種統計が物語っています。

今後長期的に稲城の人々の幸福度が高い状態であるためには、働くことがどうしても生活の中心となってしまう20代、30代、40代の方々が、今から将来のことを見据え、一步を踏み出す度胸と、周囲の協力を引き出す愛嬌を持って、どのように生きていくのか考えていただくことがとても大切です。

そのために、本年度、稲城青年会議所では、若い世代の皆様が、中長期的な展望に立つ

て、今をどう生きていくのかを考える機会を設けます。

また、稲城市民の皆様が地縁を深めていくためには、市内にどのような団体があるのかを把握する機会が重要になってきます。本年度は、各団体の皆様との連携をより深めさせていただき、若い世代の方々が、市内にはたくさんの団体があり、仕事以外の活躍の場があるという情報発信を強化致します。

稲城では、若い世代の誰もが、「稲城を創るのは自分なんだ」という自覚がある、その初めの年と致します。

「子供たちの将来のために」

インターネット、スマホ、SNS、VR、AR。ある技術は瞬く間に広がり、それとともに時代もめまぐるしく変化します。私が子供の頃には携帯電話はありませんでした。今の子供たちは、小さな頃からFace BookやLineで繋がり、私がぱっと思いつかないような感覚を持って生きているのでしょうか。

そして、今の子供たちが大人になる頃には、自動運転技術や、自動学習アプリ等により、クリエイティビティ、マネジメント、ホスピタリティがいずれも必要とされない多くの仕事や職業は、AIにとって代わられると言われています。

そのような未来がおぼろげに姿を現しはじめた現在、大人が子供たちにしてあげられることは、時代がめぐるっても変わらない大切な根幹、AIには代替できない人間の本質的な部分を、実際に経験する機会を提供することです。

本年度、稲城青年会議所では、わんぱく相撲、かえっこバザールという2つの青少年育成事業を行います。

わんぱく相撲では、毎年、「これは大相撲だ」という取り組みが出てきます。そのような取り組みは、土俵上の二人だけではなく、周囲で観戦している子供たち、大人たちの心も動かします。昨年は、稲城から、わんぱく相撲全国大会の優勝者が出ました。本年もわんぱく相撲をしっかりと運営し、多くの子供たちにぶつかりあいのコミュニケーションから喜び、悔しさ等、多くの経験をしてもらいます。

いなぎ市民祭でのかえっこバザールは、子供たちが不要なおもちゃを持ち寄り、他の子供が持ってきたおもちゃと交換する事業です。本年は、子供たちが創意工夫して運営に関わる機会、子供同士でコミュニケーションをとる機会を増やします。子供たちでイベントを運営に関わることが、夢や希望を意欲的に実現しようとするための原体験となるかえっこバザールとして参ります。

### 「稲城青年会議所の魅力を高める」

稲城青年会議所の会員は、我々自身が「明るい豊かな社会」の実現のために、20歳から40歳の若者が「奉仕・修練・友情」の三信条のもとに切磋琢磨している団体であると認識しております。しかしながら、広く市民の方々に認知していただけているかどうか、まだまだこれからだと感じています。地域に関わりたい、社会を少しでも良い方向に変えていきたいと思う方がいるとしたら、我々はまずその方に稲城青年会議所の存在を知ってもらわなくてはなりません。パンフレットやポスター、インターネット上の情報発信等、これまで以上に力を入れて認知度を高め、地域の若者が交流できる機会を提供し、稲城青年会議所の魅力を各会員が自身の言葉で瑞々しく語ることで、会員拡大と、各事業への参加者の増加へ繋げて参ります。

もう一つ、私が力を入れたいのは、会員が運動に参加しやすい環境を作ることです。会員全員が会議の内容をいつでも確認できるようにする、スケジュール等の情報を適時に発信する、メールやSNSだけでなく電話や対面でのコミュニケーションを増やす。このような地道な取り組みを続けることで、積極的に参加する会員が増え、参加することで生まれる出会いや会話から親密さや楽しさが生まれます。これが例会や事業を含めた青年会議所運動全体の質を向上させます。

認知度向上と、運動の質の向上、本年はこの両輪をしっかりと回して稲城青年会議所の魅力を高め、その結果を会員拡大に結実させます。

### 「むすびに」

九州大分の出身で、地縁も血縁もなく事業を始めた私は、少しでも人との繋がりができればいいと、稲城青年会議所に入会し、2013年の賀詞交歓会で皆様に入会を祝っていただきました。それから5年、稲城青年会議所は、本気で取り組む機会を私に与えてくれました。

「仕事で失敗したら取り返しがつかない。しかし、青年会議所は失敗が許される団体だ。本気で取り組んでいる人間を悪く言う人間はいない。与えられた機会は、多少背伸びしてでも取り組んだほうがいい。」諸先輩方は口を揃えます。私は、その言葉を信じて、思い切って背伸びをして、背伸びで足りないときにはジャンプをして取り組みました。そして私が信じた言葉は本当でした。私は本気で取り組み、たくさんの失敗をしましたが、皆暖かく励まし続けてくれました。そして、まだまだ未熟者ではあるものの、5年前とは明らかに違う、かつて感じていた袋小路のような感覚から抜け出し、一つ上のステージに押し上げてもらったという実感が私にはあります。

仕事とも、家族とも、友達とも違う、地域や社会のために、また自己成長のために、切磋琢磨しあう関係。その人間関係を育んでくれた稲城に感謝すると共に、さらに多くの稲城の皆様にも生き方を考え地縁を深めてもらい、素晴らしい仲間と楽しく実りある1年とすることをお誓い申し上げて、理事長所信とさせていただきます。ご指導ご鞭撻の程、どうぞ宜しくお願い申し上げます。